白川ユウコと松下菜水の歌

石山　朱音

白川ユウコと松下菜水は、共に「コスモス」のシリウスに属する歌人である。私が二人の歌にひかれたのは、二人が自分を冷静に見つめていて、歌の表現が的確だからだ。

これより「コスモス」から抜粋した歌を見ていくが、まず白川の歌から引いてみる。

雨の字は壁を隔ててひとりずつ涙を流す雨
は止まない　（二〇二四年九月号）

この歌は、「雨」という字の成り立ちから発想されている。四句の「涙を流す」のところだけに白川の心情が直接的に表現されているが、何か深い哀しみがあったのだろうか。哀しみは壁を隔てているから、たった一人のものである。他の人とは分かち合えない。

なお、「COCOON」（29号）に、「母の字を内に抱える海の声聴けば海とは男と思う」という歌がある。この歌も、海という漢字の成り立ちから発想されて出来た歌である。

わたくしを四十八年乗せてきて硬くもなる
わよね足の裏　（同前）

面白い歌である。白川が四十八年生きてきた実感が籠っている。人生の節目の歌といえるかもしれない。足の裏の歌はあまり見ない。そこに目をつけているのがユニークだ。余談めくが、「COCOON」（32号）に「下駄箱に下駄と草履と地下足袋とサンダル、スニーカー、ピンヒール」という歌がある。作者は多様な履き物を揃えているようで、併せて読むといっそう興味深い。

かなしみをすべてあなたのせいにして泣い
ていたころつけていたシュシュ　（二〇二四年十月号）

シュシュを小道具に使って、青春の回想をしている歌である。この場合のシュシュは、若さの象徴になっている。若さゆえの自分しか見えていない恋愛を歌っている。

真実の愛は存在するのだと証明した深なさ
け系女子　（同前）

作者はいつも時代に敏感で、常に今を生きている。〇〇系という言葉は、今よく使われている言い回しである。流行りの言葉を使って、情の深い女性の愛を歌っている。

さようならあなたをずっと追いかけたわた
しはわたしを愛してました　（同前）

この歌も、昔の恋愛を歌っている。相手を愛しているはず

が、本当は自分の方をより愛していた、自分本位の恋愛だったと言っている。今は昔の恋愛を冷静に振り返り、その時の自分を分析している作者である。

白川は〈泡立草〉の君としてあなたの物語
に咲きましょう　（二〇二四年十二月号）

「あなた」という相手は、作者のことを「〈泡立草〉の君」だとイメージしている。もしそうなら、私はあえてイメージを壊すことなく、あなたの想う私のままでいましょうという歌だと解釈した。大人の女の余裕と懐の深さを感じる。

〈泡立草〉は白川の歌によく登場する。例えば、「来年は遠くへ行こうときみの言う泡立草の一級河川」（歌集『制服少女三十景』）という歌もあるように、泡立草という黄色の花は、白川にとって特別の花のようだ。

カルピスの瓶の包みのしわしわの紙をさす
って長かった夏　（二〇二五年一月号）

ある年齢以上の人は、カルピスの瓶の包み紙がしわしわだったことを覚えていると思う。しわしわであることが分かるのは、水で割るためにカルピスをコップに注ぐからだが、あの感触がこの歌で鮮やかによみがえってくる。

夫に額すりつけているわれよりも猫はかわ
いいだから飼わない　（二〇二五年二月号）

猫を飼ったことのある人なら共感する歌だと思う。他の女性はともかく、猫の仕草にはかなわないと思ったのではないか。白川は、自分の魅力を充分知っている人なのだろう。そんな白川でも猫には勝てないと思った。そんな可愛らしい一面がうかがえる。

貝は死ぬ真珠ひとつを抉られてわたしの耳
たぶを死が飾る　（同前）

私も真珠を身につけるが、このような発想はなかった。抉るという表現が、死をより強く感じさせる。怖い歌である。貝の死を代償に身を飾ってまで、女性は魅力的でありたいと思っているのだ。

春の日に首のほくろを取る手術しらないバ
スに揺られてゆきぬ　（二〇二五年七月号）

ほくろを取る、というのが印象的である。春の日に、ほくろを取るためにバスに揺られている。その心もとない気持ちが伝わってくる。そこには、手術への不安な気持ちもあったのかもしれない。

次に、松下菜水の歌を見ていく。

眠れない夜のしづけさに浮かびきて鋭しし
ろがねの秒針の音　（二〇二四年九月号）

眠れない夜の情景が的確に表現されている。眠れない夜は孤独だ。この世の中に自分一人しかいないように感じる。朝が無事に来ないような不安。しろがねの秒針が鋭く作者の心に刺さってくる。

存分に子どもの気分を味はへり母に布団を
かけてもらつて　（同前）

松下は、まだ子どもの頃に未練があるのではないか、という印象を受けた。松下の中には、子どもの頃をもっと味わいたかったという気持ちがあるように思う。この日は満足した

のだろう。

トリックが暴けぬままにうたた寝すハードカバーの本を枕に　（二〇二四年十月号）

私にも思い浮かぶ光景である。長編のミステリー小説を読んでいるのだろう。ストーリーの半ば頃なのではないか。この本のタイトルが知りたくなる。

犯人がわかつたところで気付きたりこの本まへに読んだ気がする　（同前）

この歌もよく分かる。本の装丁が以前と変わっていたり、タイトルが変わっていたりして、また同じ本を買って読むことがある。初めての本だと思って読み進めると、なぜか途中で犯人が分かってしまうのだ。でもそれはそれで、新鮮な気持ちで楽しめることもある。きっと作者もそうだったのではないか。

還暦を迎へた夫に買つてやる〈赤いきつね〉と〈かっぱえびせん〉　（同前）

どちらもパッケージが赤系だったと思う。これは還暦に合わせたのだろう。おままごとのような気分を味わっている印象を受けた。スーパーで売っている有名な二つの商品、作者のわくわくした気分が伝わる。この商品は夫の好きなものなのか、あるいは作者の遊び心なのか、考えるのも楽しい。また、買ってやるという母性を感じさせる言い方も含みがある。

〈はま寿司〉でタコ、イカ、かんぺう巻、玉子頼めば夫が「ガキだな」と言ふ　（同前）

ガキと言われて作者は決して不快ではなかったと思う。松下は、二首目の歌にもあるように、子どもの気分を味わうことを喜びとしている。はま寿司の少し狭い座席で、二人がお寿司を食べているのがほほえましい。

約束の五年が過ぎぬ出てゆきし夫は多分もう戻らない　（二〇二四年十一月号）

どんな約束だったのか、五年間の期限つきの夫婦だったのか。前の歌から突然ショッキングな歌になった。夫は戻らないことを松下はどこかでわかっていたような、覚悟していたような気がする。

先生のかげで手を振る児はとほき日のわれならむ手を振りかへす　（二〇二五年一月号）

松下はこの子どもに感情移入をしていて、昔の自分を見ている。まだ作者の中には、少女の日がリアルに残っているようだ。だから松下は、この児に手を振り返さずにはいられなかったのではないか。きっと昔の自分に手を振っていたのだろう。

「しょうもない男よねぇ」と笑ひ合ふ先妻とわれ、蕗煮食べつつ　（二〇二五年二月号）

この蕗はお店のものなのか、先妻の手づくりなのか、いろいろ考えた。この場面で蕗煮を食べているのが、少しのんきな気持ちにさせてしまうのも効果的だと思う。大変なことが起こっているのに、のんきな空気があるところにこの歌のすごさがある。まるでドラマの一場面のようだ。ショッキングな歌でありながら、くすっと笑ってしまう歌でもある。

ゆふぐれの風の音色に耳澄ます砂漠の遊牧

民のごとくに　（二〇二五年六月号）

静けさを感じる。作者の心の静けさである。孤独だけれど淋しさよりも風と一体化しているイメージだ。それが遊牧民という言葉とぴったり合っている。

＊

白川は二〇二五年、『ざざんざ』という第三歌集を出した。引用した一首目、二首目の歌がその歌集に収められている。白川は青春時代をきちんと卒業したのだと思う。昔の恋の歌はからっと乾いていて、今の自分とは完全に切り離されている。思い出として歌っているというより、今の自分の土台のように感じているようだ。だから、読者である私もそこに入っていって、自分の青春と重ねることができるのだ。どこか普遍的なのだろう。先に述べた泡立草の歌で、泡立草が手を振る歌は、舞台を観ているような感覚になった。題名は忘れたが、原作が寺山修司の舞台である。その中に恐山の場面があり、舞台の上にはたくさんの風車があった。その時のイメージに近い。泡立草がいっせいに手を振っている。

また、白川の歌は、インパクトの強い小道具を使った歌がある一方、穏やかな日常の歌もあり、大きく二つに分かれている。常識的でまっとうな生活を送りながらも、そこからあえて食み出して冒険する覚悟がある歌人である。白川の歌を読んでいると、風船が膨らんでいつしかパンと割れてしまうような、不穏なものを感じることがある。張り詰めていて割れたらどうしよう、どうなってしまうのかと思う。でも、その先もまた見てみたい。白川の中には、まだまだ「青春」というモチーフが隠れているように思う。まだ表現されていない歌の種子が出番を待っているようだ。

一方、松下は多分まだ青春の中にいるのだと思う。今も昔の自分を現在の自分の中に住まわせていて、共存している感じがする。そして、そんな二面性を持った自分を混在させたまま、上手く表現しているような気がする。

松下の歌には、人を引きつけるストーリー性があり、彼女をヒロインとする物語が展開されていくようだ。次はどうなるのか、はらはらして心配になるほどである。そういう歌の吸引力が魅力である。

また、この二人は歌においての自分の見せ方が上手いと思う。自分を第三者のように観察する眼がある。二人の表現方法や世界観は異なっているが、二人に共通する何かがあるのではないかと思う。白川も松下も、自分の過去を正確に記憶している。決して忘れていない。だから、過去の自分の歌にリアリティがあるのだろう。思い出して詠むのではなく、その頃にまるごと入っていって、その時の感情のまま詠んでいる感じを受ける。だから私は、二人の歌を素通りすることができないのだろう。私は二人をほとんど知らないが、それにも関わらず二人を知っているような気がする。白川とは、同じ教室にいたような気がするのだ。仲の良いグループではなく、気になるクラスメートとして。自分とは異なる世界を知っていそうな子として。松下とは、子どもの頃にままごと遊びや色水遊びをした近所の子として。そんな感じがして、白川と松下は、私にとって目の離せない歌人なのである。